

コロサイ人へ手紙2章16-23節 「まやかしの靈性」

1A 本体なるキリスト 16-17

1B 律法の儀式による裁き 16

2B キリストの陰 17

2A かしらなるキリスト 18-19

1B 御使い礼拝による自己卑下 18

2B からだの成長 19

3A 死なれたキリスト 20-23

1B 世のもろもろの靈 20

2B 消滅する人の定め 21-22

3B 肉を満たす苦行 23

本文

コロサイ人への手紙2章を開いてください、私たちの聖書通読の学びは、2章の前半、15節まで学びました。今朝は、残りの16節から23節までを一節ずつ見ていきます。

私は、毎週の礼拝がとても楽しみです。先週も、私自身が神から受けたものを分かち合うことができ、祝福されました。一人一人が、御霊によって受けたみことばを分かち合ってくださいる時に、それもまた御霊による言葉なので、私たちの魂が高められます。キリストがおられることを知ります。そして、先週は三日間、東アジア青年キリスト者大会で、礼拝を、情熱をもって献げ、濃密な交わりを持つことが出来ました。

私たちがキリスト者として生きる醍醐味はなんでしょうか？それは、ただキリストだけになる、ということではないでしょうか？イエス様がすべてのすべてであられるように、私たちの信仰の中でも、イエス様だけになっているときに、心から感謝と喜びがあふれます。パウロは、このことを伝えたくて、コロサイの人たちに書いています。2章7節に、「キリストのうちに根ざし、建てられ、教えられたとおり信仰を堅くし、あふれるばかりに感謝しなさい。」と勧めています。

ところが、このようにキリストにあつてあふれるばかりになる時に、批判する人たちが出てきます。あなたがたは、これをやっていない。あれをやっていない、と言います。これらのことをやっていないから、まだあなたがたは不十分なのだ。これこれをやっていないといけない、と裁きます。みなさんも、知識がいっぱいあるような人、権威や力がありそうな人から批判されたり、批評されると心が弱まることはありませんか？あるいは、自分自身で、「私は、キリスト者としてはまだまだできていない。」と思いませんか？そこには罫があります。そして、すべての源であるキリストから離れて、

何か違うことをやり始めようとするのです。

これがコロサイの教会で起こっていたことです。16 節に、「あなたがたを批判することがあってはなりません。」と言っていますね。18 節にも、「あなたがたを断罪することがあってはなりません。」とあります。あなたがたが、キリストだけで満ち満ちるのだ、キリストにあって完全なのだということから引き離す、いろいろな、まやかしの教えについて見ていきます。

1A 本体なるキリスト 16-17

1B 律法の儀式による裁き 16

¹⁶ こういうわけですから、食べ物と飲み物について、あるいは祭りや新月や安息日のことで、だれかがあなたがたを批判することがあってはなりません。

コロサイの教会には、いろいろな教えが混ざったものが入り込んでいることを私たちは学んでいます。グノーシス主義があります。それは前回、知恵と知識の宝はキリストの内に隠されているという言葉を読みました。グノーシスは、自分たちこそが知識を持っている、それは多くの人には隠されているとしました。そして、そのような雰囲気の中で、ユダヤ人の律法も取り入れられました。律法では食物規定で、食べてよい動物とそうではない動物に分れています。そして、律法には、七つの祭りがあります。その中の三つ、過越の祭り、五旬節、そして仮庵の祭りがあります。そして、毎月の新月の祭り、そして安息日があります。これらの教えを、自分たちの中に取り入れました。

ここで大事なものは、これらの祭りを行うことが間違っているということではありません。それらはとても良いものです。ユダヤ人でイエス様を信じた人々の中で、これまでのユダヤ人の慣習であることをそのまま行っている人々がいます。メシアニック・ジューとも言いますが、イエス様にあってこれらのことが成就したのだという認識のもと、イエス様に感謝してこれらの儀式を行っています。問題は何かというと、「これらのことを行わないと、あなたは霊的になれない。まだ完全ではない」とすることです。それで、「あなたがたを批判することがあってはなりません」ということなのです。

2B キリストの陰 17

¹⁷ これらは、来たるべきものの影であって、本体はキリストにあります。

律法の役割の一つが、「影」だということです。本体があることを指し示すものということです。イエス様がユダヤ人たちに、「ヨハネ 5:39 あなたがたは、聖書の中に永遠のいのちがあると思って、聖書を調べています。その聖書は、わたしについて証しているのです。」本体であるキリストを、旧約聖書は証しているのです。私たちが旧約聖書を学ぶ時、そこにはキリストが証されています。本体の影のように、本体があることを指し示しているのです。私は、旧約聖書が大好きです。律法や預言を教えることが大好きです。なぜか？というと、そこにはまさしく影があるからです。

私たちはすでに本体であるキリストを知っています。ですから、律法や預言にあるキリストの姿を見て、そこからますます、この方のすばらしさを知ることができます。

例えば、食べ物を規定するレビ記 11 章に、これこれを食べてはいけない、これは食べてよいという、食物規定があります。「11:3-4 動物のうち、すべてひづめが分かち、完全にひづめが割れているもので、反芻するもの。それは食べてもよい。4 ただし、反芻するもの、あるいは、ひづめが分かちられているものの中でも、次のものは食べてはならない。らくだ。これは反芻はするが、ひづめが分かちされていないので、あなたがたには汚れたものである。」なんだ、こりゃあ～(What is it??)となると思うんです、これだけ読んだだけでは、けれども、これらはキリストの影であるとみなすと面白いことが見えてきます。反芻することは、外からものを安易にそのまま中に入れない姿を見ます。蹄があるのは、地上を歩いているけれども、地上に接していないことを表しています。これは、まさにキリストの姿です。主は人の姿を取り、世に來られました。けれども、世のものではありませんでした。聖め別たれていました。世の中にいましたが、世に属していませんでした。そして、私たちがキリストのうちに歩む時に、同じように世にはいるが、世と交わりをしないのです。

祭りについては、どうでしょうか？レビ記 23 章に、例年行う祭りが七つ書いてあります。5 節から過越の祭りが書かれています。過越の祭りには、子羊を屠ってその血を家の鴨居や門柱につけます。そして子羊の肉を食べます。キリストが血を流されました。そしてこの方の肉が、傷を受けられました。まさに、主は過越の祭りの時に十字架につけられました。イエス様はその前に、過越の食事で、これはわたしのからだです、これは、わたしの流す血ですと言われて、過越の子羊はご自身のことを証していることを教えられたのです。そして、次に 10 節から初穂の祭りがあります。これは過越の祭りの三日目に行います。コリント第一 15 章には、イエスが復活の初穂となられたと書いています。イエス様は、三日目によみがえられました。そして、五旬節があります。それは五十日後に行う祭りですが、その日に弟子たちに聖霊が降りました。秋の祭りについては、イエス様が再び來られることを預言しているものと重なります。このように、本体であるキリストを知っていれば、これらの祭りはキリストを示していることが分かるのです。

しかし、本体そのものが來たのだから、私たちはこの方に結ばれていることで、それで十分です。問題はその影にしか過ぎないものに、そこに本質があるとみなすことです。キリストご自身につながるのではなく、キリストについてのものにつながるのです。キリストご自身につながるのではなく、キリストに関わるものに逸れていくと危険です。キリストを示すものが目的になり、キリストが手段になるのです。本末転倒です。祈るのは、キリストが私たちの信仰の目、心の目にはっきり見えるようになるためなのに、祈ることそのものが目標になったらどうでしょうか？どれだけ長い時間、祈っていたか？ということが競われるでしょう。そして長く祈っていない人は肉的、長ければそれだけ靈的ということになります。しかし、それはまさに、肉を喜ばせている行為ですね。自分がいかに祈

れているのかを威張っているのです。聖書を読むのは、キリストを知り、この方に会うためです。けれども、聖書の知識がどれだけあるのかが靈的な指針だとしたら、同じように問題です。

異端の特徴は、一つ一つを眺めると、それはとても正しいことをしています。その一つ一つは、エホバの証人の人たちは、聖書をしっかり読みますね。そして、聖書は神のことばだと信じています。伝道を熱心に行います。これらのことを行っていますが、自分たちがエホバに忠実であることが大事であって、これらの行いによって救われる、神の国に入れることを目標としています。キリストが対象ではないのです。キリストについてのことには熱心ですが、キリストに結びついていないのです。

2A かしらなるキリスト 18-19

1B 御使い礼拝による自己卑下 18

¹⁸ 自己卑下や御使い礼拝を喜んでいる者が、あなたがたを断罪することがあってはなりません。彼らは自分が見た幻に拠り頼み、肉の思いによっていたずらに思い上がって、

コロサイの教会には、グノーシス主義に合わせて、神秘主義、あるいはスピリチュアリズムも入ってきました。これは、神は霊であって、その神から放っているものを持っている神々と呼ばれる存在があります。それらが天使とか呼ばれるものですね。そして、霊である神から離れれば離れるほど、その輝きはなくなり、そして肉体に最も近づく時に、その輝きはなくなるという考えです。イエス・キリストは、グノーシスの異端の中では、仮に現れて、肉体を取らなかったと教えます。肉体を取っていれば、この方が悪になってしまうから、という考えだからです。そこで、神秘主義の中では、いろいろな神々と呼ばれるもの、天使と呼ばれるものに接することで、より神に近づける、より靈的になれると信じていたのです。

ここでも大事なものは、御使いそのものは、存在しているということです。そして御使いの働きもあり、活発に行われています。聖書を読めばその通りなのです。私たちは、物質主義の世界、世俗の世界に生きていますから、目に見えるものだけを信じてしまいがちです。科学を信奉して、もはや科学が科学でなくなっています。目に見えることの背後には、目に見えない存在が働いているというのが聖書の世界であり、私たちは、霊の戦いの中にいることを使徒たちは教えています。しかし、これらの良いもので、キリストだけでは不十分なのだと教えることが問題なのです。これらの靈的世界の体験がなければ、あなたがたは十分ではないと教えることです。そして、キリストから離れて、それらの神秘的体験を求めていくように教える者たちがいたようです。

違いますね、私たちが必要なのは、そのような天使体験ではありません。イエス体験です。何が必要かと言えば、もっとイエス様を知ることです。この方で満ち満ちることです。いわゆる教会で

バイバルが起こるというのは、イエス様がこれほどまでにはっきりと見える、この方のすばらしさがあがめられる。この方の御国がはっきり見える。もっともっとイエスを知っていくことです。

ところで、パウロがなぜ、「自己卑下」という言葉をここで使っているのでしょうか？これは、イエス・キリストに直接つながるなんて、おこがましいことだ。私たちは、キリストにつながるができるという高ぶった考えを持たずに、その前の段階、他の仲介によってキリストに近づくべきだとする考えです。いろいろな霊的な交信を、仲介者たちを通してそれでようやくキリストに近づくのだ、とすることです。いかにも謙虚に聞こえませんか？どうか、惑わされないでください！これこそが、思い上がりです。幻とか見て、そういった神秘的体験で、神に近づけると考えること自体が思い上がりで、肉の思いにふけているのです。

キリストにつながるということは、最もへりくだった行為です。十字架につけられたキリストが自分のため、自分の罪のためだと信じて、受け入れることは、最も心を貧しくしなければいけない行為です。自分はもうだめだ、神の前には決して立つことはできない！と嘆く時に、主は幸いだと宣言してくださいます。それが、十字架なのです。

2B からだの成長 19

¹⁹ かしらにしっかり結びつくことをしません。このかしらがもとになって、からだ全体は節々と筋によって支えられ、つなぎ合わされ、神に育てられて成長していくのです。

ここが、コロサイ人への手紙の中心テーマと言ってもよいでしょう。かしらに結びつくことをしない、という問題です。教会は、キリストのからだです。からだは、私たちキリストを信じる者たちです。私たちが、からだの各器官です。それぞれがつながっていて、互いに支えられ、つなぎ合わされています。けれども、その各器官が、かしらに結びついているからこそ、それぞれがつながっていて、互いに支えられ、そして成長します。コロサイ書は、キリストのからだの、かしらの部分、つまりキリストご自身を伝えている手紙です。この方がいかにすぐれているのか？すべてのすべてであるかを教えています。だから、この方につながれていれば、異端が教えている知識とか、律法とか、神秘体験とか、すべてが満たされているのです。

3A 死なれたキリスト 20-23

1B 世のもろもろの霊 20

²⁰ もしあなたがたがキリストとともに死んで、この世のもろもろの霊から離れたのなら、どうして、まだこの世に生きているかのように、

「この世のもろもろの霊」というのは、「幼稚な教え」とも訳すことができるものです。8節に、「それは、人間の言い伝えによるもの、この世のもろもろの霊によるもの」とありますね。これは、コロサ

イの教会の人々が、信仰を持つ前、いろいろな言い伝えがあつて、それらを守り行っていました。それらは幼稚な教えであり、その背後には、もろもろの霊があるということです。日本人に分りやすくいうならば、「罰が当たる」ということです。仏教や神道に関わる慣わしには、いろいろな儀式がありますね。それらを行わないと罰が当たる、と思うのです。仏式の葬儀の儀式には、いろいろなやり方があります。それらを守り行っているのですが、それは行わないと罰が当たるし、人々から白い目で見られると恐れているから行うのです。その背後には、この世のもろもろの霊がいる、ということです。そのため、私たちは恐れに奴隷になってしまいます。

しかし、自分はキリストと共に死にました。これは、キリストが十字架に付けられて、これらの呪いをご自分の身に受けてくださったということです。木にかけられたものは呪われるという律法がありますが、イエス様はそれを十字架の上で成就してくださいました。だから、この方を信じる者は、ただアブラハムに約束された祝福を受けるのみなのだ、ということです。何か悪いことがあつても、それは愛する神の御手の中にあると私たちは知っているのです。

2B 消滅する人の定め 21-22

²¹「つかむな、味わうな、さわるな」といった定めには縛られるのですか。

コロサイの教会にやってきた、グノーシス系の異端には、肉に関することは悪であるから、肉体の活動には関わるなという、禁欲主義もありました。これこれを食べてはいけないといって、食欲を悪であるとみなしました。触るなというのは、女に触るなという意味が含まれているでしょう。結婚関係や夫婦関係を持つなという教えです。このように、禁欲的なことを行うことによって、神に近づけるとする教えが流行っていたのです。

キリストの教えには、禁欲的なものも確かにあります。例えば、一定の期間、食事を絶つこと、断食と祈りがありますね。イエス様は四十日間、断食をされました。そして、貧しい人に施すために財産を捨てなさいというイエス様は、金持ちの青年に教えられました。食事を絶つこと、貧しい人に施して衣食で満足すること。これら自体は間違っていない。パウロ自身、独身で、コリント第一七章では、独りであることはもっと良いことだとまで勧め、キリストのゆえに独身であることの良さまで教えています。けれども、これらのことをしなければ、何か肉体的であるとか、十分に救われていないとかすると、大問題なのです。

私が、キリスト者になる前に悩んでいたことがありました。南北問題というのを学校の教科書で学びました。南半球の人たちの貧困を犠牲にして、北半球の人たちが富んでいるという話です。私は、何か自分が毎日食べている食べ物のことまで、罪悪感を抱くようになりました。けれども、今、SDGsなどで、牛肉を食べることは悪であり、こうろぎなど昆虫を食べなければいけないなどの話がありますね。けれども、キリスト者になって聖書を読み、イエス様がよく食べておられたこと

を見て、安心したのです。パウロが、「神が造られたものはすべて良いもので、感謝して受けるとき、捨てるべきものは何もあります。」と言っています(I テモ 4:4)。

けれども、こうした禁欲的な教えは、教会の中にも入ってきます。ある牧師さんが教えてくださった話ですが、世界宣教のためにあなたがたは、献げるべきだという説教を何度も聞いたそうです。「あなたが持っている 100 円玉で、貧しい国の人の、一日の食事を養うことができるのですよ。」という問いかけも何度となく、聞いたそうです。私は、それは間違っているとはっきりわかりました。必要があるから、世界宣教に関わるのではありません。神に召されるから、その国の人たちのところに行くのです。神の恵みによって、行くのです。そんな貧しい人たちのほうが、よっぽど信仰に富んでいます。自分が献げることによって問題を解決するなんというのは、高ぶりです。神の恵みがあるから、献さげさせていただくのです。

²² これらはすべて、使ったら消滅するものについての定めで、人間の戒めや教えによるものです。

イエス様が、「マル 7:18a-19 外から人に入って来るどんなものも、人を汚すことはできません。それは人の心には入らず、腹に入り排泄されます。」と言われたのを思い出しますね。食べたなら、排泄されるのです。そこに心の中で信仰を働かせているかどうかの方が大事であり、食べ物そのものは、排泄されるだけですから汚れることはないのです。

私はある時、漢方を飲んでいたら、それを見たある人が、厳しい言葉を投げかけてきました。その人はある宗教の信者で、薬を飲むと魂が汚れるという教えがあるために、そうやってきたのです。

けれども、教会にそういった教えが入り込むことがあります。有機農法のほうがよいのだとして、教会の中でそれを強く勧める人たちがいます。農薬で私たちは毒されているのだと。ある時は、原発事故の後、福島産の食べ物が汚染されているという情報も教会に中に持ち込みました。菜食主義の人が、教会の中でそれらを避けるべきだと考える人もいるかもしれません。ワクチンもそうです。それを接種したらあなたは毒を入れているようなものですよ、というのです。しかし、これらのことは、信仰とは何ら関係ないのです。たとえ、その情報が真実の一部を反映したとしても、信仰とは何ら関係ないのです。むしろ、恐れによってそれを話しているのであれば、かえって、心は汚されているのです。なぜなら、清い心は、神の愛で満たされているのであり、恐れが取り除かれているからです。

パウロは、これらを「人間の戒めや教えによる」と言っています。人間による教えは、人をしばります。そればかりを考えるようになり、それらのことを行っていないと救いを失うかのように取りつかれます。しかし、神による教えと命令は、人を自由にします。主は、ご自身が真理であり、真理

に留まれば、あなたがたは自由なのだと教えられました。ですから、人間の戒めや教えによって、しばられないようにしてください。

3B 肉を満たす苦行 23

次が、まとめになります。

²³ これらの定めは、人間の好き勝手な礼拝、自己卑下、肉体の苦行のゆえに知恵のあることのように見えますが、何の価値もなく、肉を満足させるだけです。

知恵があるように見えるが、価値がなく、肉を満足させるだけだ、という結論であります。高ぶらせるだけなのです。フィリピンで、キリストが十字架に付けられた苦しみを味わうために、復活祭の直前に、そのまま体を傷つけて、手足に釘づけにする催しがあります。しかし、それらによって自分はこれで神から好意を受けると感じているそうです。罪が赦され、病気も治ると考えているそうです。そして、人々からキリストのようになったとする称賛を受けます。自分の苦行によって救われるという高ぶりが、まだあります。人々から称賛されるというぬぼれがあります。これらの肉の問題から、何ら解決されていないのです。

私たちにとって、最大の知恵は、キリストの十字架の前に出ることです。聖霊によって、罪を明らかにしていただくことです。そして、神がキリストにあって、それらの罪をすべて赦し、洗い清めてくださることを信じることです。自分が神のためにすることではなく、神がキリストにあってくださったことに信頼を置く時、その時に私たちは、聖い者、賢い者になります。神の恵みこそが、私たちを変えるのです。